

母親・・・時には動物のように

お母さんは動物みたいに

曾野 井深さんのお考えについて1番考えさせられましたのはね、私、女の立場から見ますと3歳までの子供をもつ母親って、大体“動物”なんですよ。特殊なえらいお母さまは別として、もう、洗って、着せて、おしっこさせて、だんなのご飯をつくって…。そういうときに、意図的に教育の方向を決めなければならないということに、びっくりし、非常に目を開かせられた思いでした。

同時に、それじゃ、みんなそれができるだろうか、何かその「折衷説」みたいな部分があるんじゃないかな、なんて…。

井深 はあ。具体的に折衷説というのはどんな…。

曾野 まず、夢中になって動物的に育てることは、いたし方ない。ただ、動物のように育てる間にも…。

井深 そういうことを頭に置いて…。

曾野 はい。父親、母親がまともであれば、人生に対する何か好みみたいなものがあると思うんですね。高級なことじゃないけど、お父さんがうちへ帰ってきて、たとえば夏なら、じんべいさんに着かえて、ビールを飲んで、そこでしゃべること…それは上役の悪口かもしれないし、ローンを払うのに大変だ、という話かもしれない。しかしその中に、やっぱりある種の人生観のようなものがある。

それから、お母さんがやっと、動物みたいな疲れの中から、お父ちゃんのために夕食作らなきゃならないから買物に行く。そうすると、買物に行っているんなものを買ったりなんかする間に、子供がキャンデーを食べると、たとえば「捨てちゃいけませんよ」とか、「同じ捨てるならこういうかごにお捨てなさい」とか、よその子がこういうふうなことをしていたら、「あなたはしちゃいけませんよ」というようなことは、そういった雌の生活でも同時にできる、大した努力でなくてすむ。「これは意図的な3歳未満の教育だ」なんて言わなくても、自然に入るんじゃないかな、と思ったのが“折衷説”なんです。

井深 はい、はい。非常に教育ということを大変なものであるとか、時間を使わなきゃならないものであるとかいうことは別に言うてはいないんですがね。たとえば、同じレコードを生まれて直後から、毎日数分ずつ聴かせて、3ヵ月、4ヵ月たったときに、その赤ちゃんはそのメロディに、自分でリアクションを示す。…たった数分なんですよ、これ。だから、やることなすことすべてにこういう気持ちを持ってやってもらえれば…そのためにえらい時間を費してもらいたいなんていうことではないのですね。

曾野 そうでございますね。また、実際それはできない。

井深 生理的な訓練ということを盛んに言っていますけど、たとえば、英語も入っている、スペイン語もフランス語も入ってる 20 分間のレコードを 1 日に 2 回ぐらいやっておく。暇なときちょっとかけておくという、それだけの話なんです、私の言うのは。ベッドのそばを通るたびに「どうしてんの」とか、「何々ちゃん」とか声をかける。そういうことが必要であるという趣旨なんですけどね。

曾野 ただ、家庭の主婦が本当に疲れてまいりますとね、その 20 分のレコードをかけるのもいやになると思うんです。私、そういう気持ちがちょっとわかります。自分が怠け者のせいか、とにかく 20 分あったら、ゴロツと寝て、まくらを出すのもめんどくさいから、ひじまくらやって…（笑い）。

井深 だけだね。たとえばカセット入れておけば、スイッチを押しておけば、1 時間鳴ってくれて、それで自動的にとまるんですからね。やるんだったら、そういうことをやってくださいということなんですけどね。

曾野 そうでございますね。

井深 いや、「幼児教育、幼児教育」というから、えらい時間を使って、大変なことをしなきゃならんような印象を与えたとすれば、私の言い方、与え方が非常に間違ってたんでしてね。

曾野 いいえ、そうじゃないんですけれども、私がいま言うように、20 分間でもいやだと思うんです…家庭の主婦というのは、それぐらい疲れる生活がある。ただ私ができると思うのは、レコードを 1 枚かけるのはめんどくさいけども、買い物に行くと、その中で道の歩き方とか、ごみをすてないとか、それからお話をしながら歩くということが出来ますね。特にこれはカセットもなくともラジオもなくとも、何してでもできる。そういうときにおしゃべりをするということは、そしてそのときにお母さんがひとつの…ちっとも高級でなくていいんだけど、ささやかな善意を持った人生観があれば、そこでずいぶんお話が違ってくるだろうなと思いますの。

井深 3 歳以下と申しましたけど、主として 1 歳以下なんですね。そうしますとコミュニケーションも、向こうがわかるからコミュニケートするんじゃないに…。

曾野 インプリンティングの段階に近いわけでございますね。

井深 コミュニケーションを引っ張り出すアクションを、お母さんは不精をせずにとってほしい。お母さんはそれは忙しいには違いないけれども、追っかけ回してまでしようというんじゃない。ただし、3 歳ぐらいまでに大体の、言っていることとか、やっていけないこととか、そういうものをちゃんとしつけてしまえば、非常に後がラクになるということを…この「楽になる」ということを少したわなきゃウソですね。

曾野 私は大変お恥ずかしいんですが、教養がないから（笑い）…本当なんです。たとえば、オペラなんて聴いたことがなかったんです。ケルンのオペラで歌っている大変に有名な岡村喬生さんが帰っていらっしゃって「曾野さん、いっぺんぼくのオペラぐらいは聴きなさいよ」といわれて、もう恥ずかしくて…。「あなた、この前オペラ、いつ聴きましたか」

って質問されちゃったんです。そんな質問に答えたくないんです、恥ずかしいから(笑い)。「1960年にブラジルのペン大会に行ったときに、そこでフィッシャー・ディスクォウというのを聴かされて…」、「で、どうでした」って言うから、「なんかよく、記憶ないです」なんて、恥をかかなきゃならなかった(笑い)。

とにかく、いよいよ「ファウスト」をなさるといので、去年でございますけど、伺いにいったわけです。そうしたら、結果を言うと非常におもしろかったんですけどね。メフィストフェレスがツルツパゲのかつらなんです。大ハゲ頭のね。昔のメフィストフェレスというのは、青ざめていたのだったのが、本当にギラギラした男っぽいような演出なんです。私の席の後にドイツ人の新聞社の特派員の人が、7歳ぐらいのお嬢ちゃんを連れていらっしゃるんです。私は俗物ですから、「ファウスト」の音楽がわかるわからないかより、この子がどういうふうに聴くかということの方に、ちょっと興味があったんです。歌うのは全部日本語ですから、そのお嬢ちゃんにとっては、やっぱり外国語で歌っているわけでしょう。そうしたらね、本当に、そのお嬢ちゃんは聴いていらっしゃるわけね、最後まで。それはやはり、「ファウスト」を彼女が何遍も聴いているからだと思うんです。私たちが、たとえば「ここはお国の何百里」というのを昔から聴かされて、歌詞も何も知ってるんだけど…まあこれは大変程度の悪い比べ方でございますけれども、そういうのがあるんじゃないかと思って…。

井深 生まれたときから聴いていたら、どんなむずかしい音楽であろうと、どんなにむずかしい文章、あるいは詩であろうと、そんなことは問題じゃないんです。

曾野 そうらしゅうございますね。素読もそうですけど…。

井深 クラシックの音楽ばかり聴かされていたら、それが1番フェーヴァリットなものになるんですね。だから「ファウスト」はむずかしいとか、バッハはむずかしいとか、シューベルトはやさしいとか、そういうことは一切ない、と私は考えているんなことをやっているわけなんです。繰り返すことによってどんなものでも、最初に繰り返したものは1番それが好きになる。

幼児信仰と成年信仰

曾野 私はベートーヴェンは高級で、「おサルのかご屋」は悪い、って決めたくもない。やっぱり「エッサ、エッサ、エッサホイサッサ」っていうのも、あれおもしろいんですけどね(笑い)。

井深 いや、だからね。それが高級だとかなんとかということ、そこで決めつけることは非常に間違いだけれども、この子供が育ってった後にね、ベートーヴェンを楽しめる人がいいのか、「おサルのかご屋」を楽しめる方がいいのか(笑い)。そこまで考えてても、それは0歳から3歳ぐらいまで、その人の性格の一部を築き上げる根底になる。これも非常に私大胆なことを言いますが、人間の性格というのはすべて“好きか、きらいか”ということ

で始まっていくと思うんです。

好ききらいがどうして始まるだろうといたら、繰り返したと思うんです。毎日牛乳をやったら母乳より好きになるだろうし、母乳だけやったら、母乳が1番好きなものになってくる。私はそう割り切っているんですけどね。

曾野 はあ。大体わかるんですけど、私の知り合いにそれに反対の人もいるんです。「ベーターヴェンなんか、なんもならん」という人がいるんです。「ベーターヴェンなんて、何も思想がないので、あれがもし思想があると思えば、それは別のものから補足しているにすぎないので、あれ自体は何もない」という人がいるんです。「おれはベーターヴェンなんか全然いらぬ」と。

井深 それはちょっと乱暴だなあ（笑い）。ベーターヴェンであろうがバツハであろうが、そこに芸術性があるとかないとかっていうことを議論するのは、ばかの骨頂でね。それに、どう芸術性を感じるように自分をこしらえるか、こしらえないか、ということだと思うんですね。

だから、芸術性というものは、それ自体が、曾野さんの小説の中に持ってるか持っていないかというのは、これは読む人の問題だと思いますね。どれだけ筋のいいマテリアルであるか、筋の悪いマテリアルであるかということはあるかもしれないけど、それを本当に芸術性の、崇高なものに考える人もあるし、つまらないエロチックな見方ばかりしてそれを見てれば、そういう見方もできないこともないと思うんですがね。

曾野 だから程度のいいものも悪いものも、全部あった方がいいような気がするんです。

井深 だろうと思います。非常にきれいな、ピュアーだけのものはつまらないと思いますね。そこにいろんなことを感じさせる方がもっとおもしろい、いいマテリアルだと、私はそう考えますね。

曾野 たとえば音楽・・・自分ができないから非常にコンプレックスがあるわけなんですけど、もっとわかったら、つまりもっと人生が楽しくなるという意味で、損したなあ、なんて思っているわけです。ただ、私が比較的得をしたのは、そういうものじゃなくて、もっと後年、大きくなってからしかありつけない思想的なものというのが・・・定着いたしませんでしたけど、楽しむことができた。そして、そう言っちゃ悪いけど、往々にして音楽のわかる人で、全然そういうことのわからないのもいる、私から見ると。音楽というのはひとつの陶醉だから。向こうは私たちのことを音痴バカだと思ってる。こっちは音楽バカだと思ってるわけです・・・悪い言葉ですけど。それで、もっと思想的に深いものがあるのに、音楽じゃカバーできないものもあるという見方もある。ですから、私は自分がなかったから、本当にもっと早くから音楽をやりたいかった。音楽に限らずでございますね。語学だって何だって利用できると思います。

井深 それの1番最たるものは、信仰だと思うんです。幼児洗礼を受けて、生まれたときから教会へ連れていかれて、教会の雰囲気というものの中に育って、その人に本当に信仰というものが、それは恐らく生まれてくるでしょう。それと、中学校を出てから、自分がいろいろ

る煩悶して、自分に打ちかって、そこに本当の信仰というものができ上がる、のと、これは全然異質の信仰だと思う。そう考えちゃいけませんか。

曾野 さあ…私が後の方だから…。

井深 無条件に神様というものを信仰するというのと、自分の理性をむしろ打ち砕いて、信仰というものを得ようというのと…。

曾野 私、トバ口は違うけど、同じような気がする。

井深 同じに到達するんですか。

曾野 はい。どこまで到達するかは、個性差というものなんでしてね。それとはあまり関係ない。ただ、早くから教会にずうっと行ってて、そして自然に体で信仰すれば…。

井深 そう、体で…。

曾野 私が言うのはエピキュリアン的な意味で“もっと早く信仰を楽しめた…”という態度が悪いと言われそうだけでも…。

井深 いや、いいでしょう。エンジョイという言葉でいいと思うんですよね。

曾野 はい。エンジョイですね。それができたんじゃないか、やっぱり損したな、という感じがするんです。

非科学的な豊かさ

井深 話を戻して、0歳 3歳のころは、やっぱり生理的にいい習慣というのか、生理条件をつけておくことは、ひとつも差し支えないんじゃないかと思うんですがね。

曾野 そうでございますね。つまり、肥沃な土地のようなもので、その上に何をまくかという…。

井深 そうなんです。それから後は、その人のチョイスになるんです。だから0歳から3歳までは、これは母親が思うとおりのものを、インプリントしておいていい。ベーターヴェンジャいけなく、パッパでもなく、童謡がいい、とそう思ったら、お母さんがやるときゃいいんで、何やったから悪いとかということは、別問題だと思うんです。だから何でも入れられるものは入れて、1つのかっこうだけつくっておいて、それを打ち破って、どういこうかというときに、邪魔をしなきゃそれでいいんだと思うんです。ところが何にも入れないとすれば、テレビのコマーシャルのゴジラばかりが入っちゃうことになるわけです。

曾野 いつかテレビの悪口を書いたら、「曾野さんはテレビぎらいなんだ」と言われちゃったけど、そうじゃなくて、テレビというのは、私、使い方だと思うんです。うちには80歳の年寄りが3人いるのですが…。

井深 3人ですか。

曾野 私の母と主人の両親で、79と79と80なんです。夏私たちが海に行くので、「おじいちゃんもいらしてくださいませんか」と言うと、「うん、行くよ」なんて言って、その日になると来ないんです。…要するに、甲子園だか何か、野球が見たいんですね。それを朝から晩まで見たいんだけど、海のうちへ来ると、ちょっと遠慮して、それがとぎれて…お

茶に誘われたら食堂に行かなきゃならない、それがいやなんです（笑い）。私は、やっぱり年寄りにはすごくいいものだと思う。幼児のときだけはテレビだけに頼らないで…。

井深 そう。それと、お母さんが一緒に見るということだ、と思うんです。3、4歳になったらね。見方というものを教えるべきだろうと思うんです。ちょっとこまめに…。

曾野 やっぱり選ぶのはよろしゅうございますね。

私、子供が小さいころは、まだテレビはなくてもあたりまえの時代だったんですが…。

井深 お子さん、何人育てられました。

曾野 息子一人なんです、もう23歳になりましたけど。彼の幼いころ、昔、私を育ててくれた人がおばあさんになって、また来てくれたんです。そうすると、町を歩きながら、息子にいろいろしゃべってくれて、「これは栗の木だけど、栗の木を生やすときはね、真ん中の栗と端っこの栗と、必ず2つ埋めてやんなきゃなんないんだよ」とってというようなことをこのおばあちゃんが言うんです。そのこと自体、正しいか正しくないかわからないんですが、実を言うと…。

井深 何ですって？

曾野 ほら、栗って、3つ普通ついていますでしょう。

井深 ああ、1つのイガの中に…。

曾野 私なんかは、栗の木を実から生やそうと思って、端っこの大きいのを播こうとすると、そのおばあさんは、真ん中の栗と、端っこの栗を必ずペアにして入れてやらなきゃいけないって、信じているわけです。

井深 雄と雌かな（笑い）。

曾野 そういう感じで、何かあるんですね。たとえば、そういうことね、それは厳密に植物学的に言ったら、「そんなことは全然ない、1粒でいいんだ」とおっしゃるかもしれない。ただ、息子がそのおばあちゃんにおんぶされながら…。

井深 そういう話を聞いたことは…。

曾野 それは、なんか知らないけど、非科学的であるということの豊かさがあるように思う。それに当たる部分も、もちろんそれが正しい知識ならもっといいのかもしれませんが、正しくなくてもそれは大切なことだと思います。

井深 話を、本当に人から聞くということは、まったく…。

曾野 すばらしいことでしょう。

「結婚は不成功が原型」と…

井深 旭川の小学校の方に聞いたんですが、胃の疾患のある生徒を、ずうっと統計的に調べますと、その70%は、3歳以下のときの夫婦げんかの結果ですって…。

曾野 大きくなってからのことですか。

井深 6歳になって、入学のときに、胃をずうっと、みんな調べるんですって。

曾野 お父さんとお母さんの…、おかしいな、うちの両親けんかしてたけど、私、胃は悪くならない(笑い)。

井深 だから、けんかの仕方でしょうね。

曾野 うちはまだ、地獄のような夫婦でした。ですけど、私胃なんか悪くなくて、バクバク食べてましたわ。

井深 非常に胃が強かったんですね(笑い)。

曾野 そうですね。恥ずかしいわ。

井深 それに打ちかったのかもしれないね。胃の方が…。

曾野 そうそう、これに負けちゃあ大変だと思って…(笑い)。

井深 生物というのは全部環境に打ちかつように育っていく力はあるんですね。

曾野 私、この問題もよく言うんですけど、私は両親が仲が悪かったおかげで、せめてここまでまいりました。

井深 成程ね。本質的に悪かったのですか。

曾野 父と母ですか。

井深 そこに問題があると思うんですが…。

曾野 よそのご夫婦だから、本当のことはわかりませんが(笑い)。ですけど、アウシュビッツみたいな生活だった。母に落度があると私も夜寝せてもらえませんでした。ですから、父と母のどちらが悪いかなんてことは別です。ただ、父と母のことで、殴られて、顔をはらして…。

井深 ご自分が？

曾野 はい、父が殴りますから、暴力です。それから夜眠らせない。これはどっちがいいか悪いかを超えていますでしょう。

井深 夜寝させないって、どういうことなの。

曾野 罰として寝かせないんです。

井深 ちょっとこれはアブノーマルですね。

曾野 そうです。父が、母に暴力をふるうから止めますでしょう。うんと小さいときは止めないけど、6つぐらいになると、ちょっと止めに入る。そうすると私が殴られます。朝学校へ行こうと思うと、8時ぐらいでしょう。まだ顔が腫れていて外へ出られない。10時ぐらいまで遅刻しましてね、まだちょっとおかしいんですよ、水で冷やしても。友達に「どうしたの」なんてきかれる…まあ聖心という学校は穏やかな家庭が多かったから、あまり勘ぐって考えられないからよかったのですが、「夜中に、お手洗いにいくとき、寝ぼけて柱にぶつかっちゃったのよ」…。

井深 よく、ぐれなかったですね。

曾野 おめでたかったんでしょうか。私、今でも世の中そんなもんだと思ってます。結婚も“不成功が原型だ”と思っているんです。だから私、結婚するときに、何も望まなかったんです。はげでも、でぶでも何でもよかった。ただ、寛大な人、人を許す人ならそれでいいと

思った。うちの旦那、それには合うわけです(笑い)。ほかのことはわかりませんが。

井深 感激的だな、これは。

曾野 簡単でしょう、あとは何でもいいんです。

井深 非常にすごいトレーニングを受けられたということですね。

曾野 そうなんでしょうね。ただ・・・その後があるんですけど、それじゃあ、子供を訓練するために、夫婦仲を悪くするっていうわけにもいかないんですね(笑い)。やっぱりどう考えたって、夫婦仲がいい方が楽しいですものね。だから私、絶対にアブノーマルには考えませんわ。

井深 そうすると、それは全然苦しみではなかったんですか、曾野さんにとって。

曾野 いえ、ですから いまだから言えるんですけども、「父を殺したい」と思った時が何度もありました。

井深 そう思われた！それじゃ相当ですね。

曾野 私が父を殺せば、母が楽になりますから、母のためです。ところが、殺さなかった理由というのは、母が守ってくれたからとか、それからそのときに、もう1日思いとどまろうという・・・。

井深 いいんですか、こういうお話が活字になっても？

曾野 構わないんです。小説家というものは本当に解放されておりますから。それと私は健康を与えていただいていた。心と体の健康ですね。体が弱いと、やったかもしれないと思えますよ。それで思いとどまって、時間が流れて・・・。

井深 そしていつになって、信仰を持たれました。

曾野 高校生の時です。

井深 それまでは？

曾野 私、結構幼稚でしたから、シスターたちの後姿を見て、こういうふうに、何かをやるのに一生かける人になりたいと思いました。ですけど小さい時はろくろく聖書も知りませんでした。

井深 そうですか。

曾野 ですが、私はいま、父に本当に感謝しているんです。

井深 そりゃ、そういうことになるでしょうね。

曾野 ええ、そういう極限を見せてくれた人ですから・・・。ほかの父親はそんなものを見せてくれないでしょう？ですから私にとってはいい父だったんです。

井深 そりゃしかし、本当に大変な体験でしょうね。

曾野 意識としては、ダメですけど。理性としては、とても感謝してるわけです。だから人殺しをする人に対しても、全然、自分と同等だと思っています。私も人殺しをしたかもしれないんですもの。だから、「あなたつくる人、私食べる人」じゃなくて、「私殺す人、あなた殺した人」という感じです。それがいまでも抜けません。

井深 大変なお話だ！いつお亡くなりになったの、お父さん。

曾野 去年でございます。60 過ぎまして、母と離婚いたしました。というのは、報復として、母にお金を渡しませんでしょう。昔の人って、なんかみんな父の名義になっちゃうんですね。母が少し持ってきたものでも、みんな父の名義になっていますから、母も計算高くて離婚しなかったんでしょう。

もうひとつ、善意に考えれば、私のために一緒にいたんです。父は一見いい人でしたから。慶応義塾大学の理財科を出て、外目はきさくな人なんです。だからそういう偽りの家庭を保っていけば…。

井深 一応、済んでいくわけですね。

曾野 私がだれと結婚するかわからないけど、一応両親がそろっていればいいだろうという、母には計算があったんじゃないでしょうか。そういうことはまったく不必要でしたけど。

井深 ああ、あなたのことを考えてね。

曾野 その後、父と別れるときに、私は母に、「とにかく別れるということは自由をあがなうことだから損をしなきゃいけない。全部お父さまに渡しちゃいなさい。お皿1枚まで、お父さまからもらおうと思わないで。私が全部引き受けるから」といったんです。「大体似たぐらいの生活させられるようになったから、全部置いてらっしゃい」と言って、別れてもらいました。

井深 結婚なさる前ですか。

曾野 いいえ、結婚してからです。三浦が「ああ、いいよ」というので、引き受けてくれて…。そして、父に後妻さんが来てくれた。本当に安心いたしました。…後妻さんは父をそんな人だとは思ってないわけです。結婚してみたら、果たして私の母と同じことが起きたわけです。

井深 ははあ。

曾野 父とけんかをすると、私にこっそり電話をかけてくるわけです。私しかわからないから、地獄が。私は後妻さんとこっそり仲よくしてて、それで父の最後まで今の奥さんがよくしてくれましてね。私はその方に言ったんです。「申しわけないけど、父が私に口をきくかも知れないと思うと、今でもふるえがくるんです、こわくて」、だから「父が意識がなくなったら、私、手伝います」って。「もう汚物の世話でも何でもします」…ほぼそれに近いときから、私も父の世話をしたんです。でも後妻さんが85%か90%ぐらい、至れり尽くせりにしてくれましたの。

私も一生懸命手伝って、亡くなりましたけど、後妻さんとの間には気持のいいことばかりです。お互いに、入院費も「私が出します」「いいえ、いいんです。だって私だってかせいでるんですもの」みたいに言い合いましたね。本当にこんないい後味って、ないんじゃないかと思うぐらいだったんです。

井深 あなたも、そのままでは、寝覚めが悪いですね。お母さんがこっちに来てしまって、お父さんがほったらかされて…。

曾野 いいえ、寝覚めはほんとに悪くないんです。大きくなってからではなくて、小さい時に苦

しんだわけですから。

井深 ないんですか、そうですか（笑い）。だけど、後妻さんに感謝されるというのは、やっぱりどことなく、気にはなるわけですね。

曾野 私は、人が不幸になるのを望んだことはないんです。だれでも、父でなくても幸せになってもらいたいと思いますもの。

井深 いや、えらい告白を伺いましたね、きょうは。

おわり